

テニスの「ラリー」で地域の未来をつくる 「ラリーコミュニケーション」って何だ!?

全国でインドア型テニススクールを展開するノアインドアステージ。
同社が運営するスクールや事業が、他とひと味もふた味も違うのは、なぜなのか。



「ラリーコミュニケーション」で 皆を笑顔に、生活を豊かに

兵庫県姫路市に本社を構えるノアインドアステージは、1980年にマッチ製造工場跡地の有効活用として姫路テニスクラブを開業以来、兵庫県を中心にインドアの「テニススクール・ノア」を全国30ヵ所以上で展開してきた。会員数は約3万5000人と、業界大手にまで成長した秘訣のひとつが「ラリーコミュニケーション」。単に会員にテニスを上達してもらうだけではなく、皆を笑顔にし、その生活を豊かにするために、スタッフ全員が一丸となって取り組んでいるものだ。

テニスのプレー中、双方が打ち合うことをラリーと呼ぶが、もとよりノアのコーチ陣はコート上での会員とのラリー一球一球に心を込めてきた。その精神をコート外にも広げ、コーチ、スタッフ全員が、どうすれば会員に喜んでもらえるか常に考えをめぐらせながら、会員とコミュニケー

ションをとり、会話のひとつひとつをラリーのように丁寧に紡いでいくことで、満足を超えた「感動ステージ」を実現する。それがラリーコミュニケーションなのだ。

小学校への「テニピン」出張授業で 生徒の心身バランスを整える

「プレーがうまくできたときに一瞬、子どもたちの瞳がキラッと輝く。それを見るのが大好きなんです」と笑顔で語るのは、テニススクール・ノア HAT 神戸校の鈴木勝まさるコーチだ。彼によれば昨今、子どものスポーツ離れは加速し、運動不足となった子どもたちは心と体のバランスがうまく取れずに、「自己肯定感」が低くなっているという。そこでノアは、誰もがテニスの楽しさに触れられる新スポーツ「テニピン」を普及させるべく、兵庫や大阪の小学校を中心に出張授業を行っている。

テニピンは、バドミントンと同程度の広さのコートで、ミトン型手袋のようなラケッ

ト（段ボールなどで自作も可能!）を利き手にはめ、スポンジボールを打ち合うダブルスで行う競技。サーブはワンバウンドさせて下から打つ、ツーバウンドまでOK、まずペアと交互に4回ラリーをして5球目からゲームが始まるルールなので、テニスラケットを扱うのが難しい小さな子どもや、運動が苦手な人でも誰もが楽しめるうえ、全員がボールに触る機会があるという画期的なスポーツだ。

テニピンでラケット競技の楽しさを知った子どもたちが、「テニスを習いたい」と言い出す流れもできつつある。

「テニスはさまざまな場面で、自分で判断し、決断して実行を繰り返すスポーツ。そんななかで成功体験を積むことで、自己肯定感も育まれていきます。ぜひ多くの方々に、その楽しさを知っていただきたいです」（鈴木コーチ）

子どもたちや地域社会の可能性を広げる同社のチャレンジは、これからも続いていく。